

彙報

●京都帝國大學文學部大禮

奉祝特別展觀

昨秋、御即位の大禮にあたり、奉祝のため我京都帝國大學は十一月十二、十三兩日を以て各學部教室を開放し陳列をなしたが、文學部に於ては國史陳列室、古文書室及び考古學陳列室の公開をなし、特別展觀を行ひ古文書室の陳列については展觀目錄を頒つた。

先づ古文書室にては、新井白石、及徳川光圀に關する資料の陳列があつた。即ち第一部は専ら新井白石が全力を傾倒せる朝鮮外交に關する資料で、先づ(一)新井太吉氏藏白石畫像(模本)をはじめ(二)朝鮮國王李船及び李暉の書翰(三)釜山草梁和館に於ける朝鮮使者饗應圖幅(四)正徳元年朝鮮通信使來聘に關する白石自筆の意見書及書狀で後者は九通あり、皆左大臣近衛家麿に贈つたもので、その内には將軍號の大君を改めて國王させる事を詳叙して

「日本の恥辱を一洗」云々「某此度の微功はひこり武家の御ためにもあらず天朝の御ためにもあしかるべき御事」は申すまじく候歟」云々こそその抱負と信念を披瀝して居るものなきがある。

第二部は徳川光圀の一生の大業たる大日本史編纂に關する資料が主として陳べられ、先づ(一)京都高臺寺藏狩野養朴筆光圀畫像(模本)を掲げ、(二)書狀及記錄には、自筆書狀、近衛家と徳川家との交渉の任に當つた近衛家の家臣進藤圭齊の詩集や僧百拙の詩があり、(三)小津氏の寄贈に係る大日本史編纂記錄二百四十九冊の中から、イ總括、ロ尊皇、ハ公卿側史料の探訪、ニ、地方史料の探訪、ホ南朝史料の尊重、ヘ史料の抄録の推獎、ト大日本史編纂方針、チ光圀の英斷、リ大日本史の稿本、ヌ楠木正成の贈官位、ル湊川の建碑、ヲ史官の公開講釋の十二項に分類して、大日本史編纂の事情、史料蒐集の苦心光圀の卓絶した識見を窺ふべきものが選ばれてあつた。其中、後西上皇の院宣に見ゆる光圀の尊皇事蹟、戰國時代以來中絶した大嘗會復舊に貢獻する所多きを物語る書

狀等は殊に此展觀にふさはしきものである。地方採訪に従へる史官の勤勉、失費を節約せる光圀の態度を見ては此大事業の完成の素地が窺はれる。史官一同光圀の神功皇后諭を熟讀敬服せる書狀は史家としての光圀の見識を傳へ、楠公贈官位の事實の判明に驚喜したここの見ゆる書狀にも南朝に對する尊崇を偲ぶべきものがあつた。

次に國史陳列室にては三浦、濱田、西田教授指導の下に大學院學生等の最近研究中に係るものを陳列した。これを七部に分け、

第一、平安京大内裏遺址發掘出土品。

昨年三月以來、京都市丸太町千本通西方及南方の地の敷度の發掘調査によるものにして、西方部にては大内裏豐樂院趾を考へらるべきところより發掘の殿堂の基壇及夥多の古瓦類、南方部にては太政官廳の趾と思はれる所よりの發掘品あつて此等諸瓦の中、其の製法・形式より推して平安京創設時若しくは其れに近き時代に屬するものを主として陳列し、其他該地域出土の丹羽圭介山根須惠吉政所政次郎諸氏所藏品を併せて出陳した。それらの

中、蓮華文疏瓦中房に「粟」字印あるもの、鷄尾の破片や藤原時代を思はれる鬼瓦の殘缺等注意すべきものがある

第二、近江國滋賀村遺跡發掘遺物

昨年五月以降大津京遺址の調査のため計畫發掘したる多數の出土品である。先づ宇南滋賀出土には、見事な彌生式の三個の大型の壺を始め古瓦の類があり、又高さ一尺四寸の鬼板は、中央部に單瓣十六葉蓮華文あつてそれに流雲を樹木を配した珍らしいもの、徑八寸の單瓣八葉蓮華文の疏瓦、徑六寸の複瓣八葉蓮華文疏瓦はこの種古瓦中の白眉である。次に宇滋賀里西方傳崇福寺址出土品には乾元大甕百二十枚在中の陶壺、和同開珍以下六種の皇朝錢を始め銅金具銅釘鐵釘土器陶器の破片等あつて、三種類の小土塔はその出土状態が明かであり且年代が承保三年を推定さるゝ點あるに於て珍奇をすべきものである

第三、令集解の校訂

已に約二ヶ年に亙り三浦教授指導の下に數名の大學院學生・在學生によつて行はれつゝある令集解校訂に關する資料であつて、今回十五種 of 古寫本を以て校合作成せ

る校訂本を初め使用寫本中異色あるものとして近衛家瀧書入本、稻葉通邦自筆本、和學講談所本を並べ、また同書傳寫の際生じた誤謬の事例を示す寫本の陳列等あつた。

第四、堀川塾の調査

伊藤仁齋によつて創められた堀川塾の關係資料であつて、伊藤孝彦氏に傳はつたもの、仁齋・東涯・東所畫像、筆蹟を初め、東涯筆伊東家系譜、其他古義堂の著編ごしては中庸發揮、論語古義の諸稿本八種、東所手澤の論語〔圖〕古義東涯の制度通稿本及その材料の草案。仁齋先生自筆延寶九年及貞享四年の講生初見帳、及び寶永三年始筆し

東涯先生の晩年に至る千五百餘人の名を連ねし初見帳等があり、また古學先生手帳(書簡集)、先歌卷(仁齋先生詠草)、古學先生行狀草本(東涯先生筆)、町内規定(仁齋先生自筆)、等は古學先生の爲人を偲ぶべき面白き材料である。

第五、羽束師川疏水事蹟

昨秋御大典に治水の功によつて從五位を贈られた洛西羽束師村古川吉左衛門爲猛の事蹟に關するもので、古

川系譜、爲猛自筆の日記並に惡水抜一件書類、疏水地圖、阿保婦物語と稱する述懷書、羽束師川現況寫眞等を選択して展觀したのである。乙訓郡羽束師神社の祠官であつた古川爲猛が同地方の水害を除くため文化六年より文政八年に至る十七年間、家財を傾けて遂に羽束師川を新鑿し總延長實に六千八百二十九間に及んだ、苦辛の事蹟が世に知られなかつたのを恩典に浴せる記念として陳列したものである。

第六、川端道喜粽供進事蹟

京都の粽商道喜の祖先初代川端道喜が戰國時代皇室の式微を歎き粽を供進して勤王の誠を致し、爾來皇室の御用を勤めて今日に至つた。而してその家は禁裏の築地を修理して、徽感にあづかつたので此等に關する新資料を陳列したもの、其等の中、粽供進の櫃の三重に作られて菊花紋章の鮮かある、正親町天皇女房奉書の道喜父子の功をしるせる、永正九年室町幕府奉行人奉書の餅役に關する特權を認めたる、天正五年村井貞勝の下知狀の道喜親子の禁裏築地修理により諸役免除を言へるなご興味

ある史實を物語つてゐる。

第七、我國上代短甲冑復原研究

完形を傳へるこゝ少ない古代の短甲を各種の古墳發見の甲冑の斷片、武裝埴輪、甲形埴輪、武裝石人等により全體の復原研究を試みたものである。復原されたものには

衝角付冑及綴。横別鐵板銜止式短甲。三角板革綴式短甲。襷。

頸鎧、肩鎧、籠手、草摺。革覆輪、綴革。小札形式及威法など細部に亙りて其の製作品、及憑據の材料を併せて陳列した。

●大興古版本展觀

昨年十二月七日京都で數日に亙つて開催された圖書館大會を期して京大圖書館で古版本展觀が催された。三部に分類し、第一部に先づ勅版八點を陳べて御大典奉祝の意を表してゐる。慶長二年刊行の錦繡段・勸學文、四年刊行の書紀神代卷・職原抄等が注目されるが、此等が皆活字版なるも興味深く、前二者の跋語に朝鮮の工に模して活字を採用せる事情を物語るものがあつた。第二部官版類は慶長四年刊行孔子家語十年刊行東鑑の類から慶應年間英吉利單語編・砲科新論の如きに至る代表的のもの

三十五點が展べられてその變遷の跡を見る便にしてゐる。第三部藩版としては六十一藩刊行書百五十七點が蒐集され、その中高田藩の明史稿・松江藩の延喜式・徳島藩の資治通鑑綱目全書・鹿兒島藩の成形圖説（手彩色）の如き大名刊行の名に背かぬ堂々たるものであり。水戸藩大日本史・桑名藩集古十種等には更に別な興味が覺えられる。猶一方では自藩學者の著作、藩内部蹟を刊行して顯揚するものも多く、かく多數を一室に陳べられた事は地方文化發達を比較考察する上に有益な企である云ひ得るであらう。

●植村評議員の訃

本會評議員文學博士植村清之助君昨年の秋九月初旬胃腸の疾患に罹り十月十一日病革まつて溘焉長逝された、享年四十三。

博士は京都に生れ、府立第二中學校、第三高等學校を經、明治四十四年東京帝國大學文科大學西洋史學科を卒業、更に京都帝國大學大學院に入學して研鑽を積み、大正七年九月以來講師、助教教授として京大に西洋中古史を

講じ、また會では第三高等學校、及び大谷大學に西洋史を講述された、本會に於ては評議員として多年盡瘁を惜まれなかつたことはこゝに多言を要しない。殊に昨年の一月から庶務會計を擔當して居られたのである。

博士は資性篤實精勵其の深邃な學殖、高潔な人格は知人後學のひそしく敬重するところであつた。嚮に原教授逝かれ、昨春阪口教授易簣された京都大學の西洋史學科にありて、博士は一層の奮勵努力を加へられ、また多年の蘊蓄を傾けて「歐洲中世史初頭に於ける國家的社會的轉換期に關する研究」を起稿し、病床に在て遂に脱稿された。此の編著に對しては已に學位授與も決定された。しかるに不幸、天壽をかさず、學界の博士の學識を待つこと切なるものあるまき、溘焉世を去られたのは洵に痛惜の極である。

●京都帝國大學史學科學生朝鮮

見學旅行 (上)

見學旅行として多年の希望であつた朝鮮旅行は西田教授の朝鮮京城帝國大學に於ける講義のため出張を機とし

同教授指導の下に遂に決行するに至り昨年十月十七日の神嘗祭當日中村助教、大學院學生等一行二十一名、半島踏破の喜びを抱いて京都驛を出發した。

その夜は玄海灘の波濤を蹴つて進む關釜連絡船の内に明け十八日早旦、釜山港に入つた時我等を迎へた半島は絶好の秋日和で、天高く氣澄み、眼界に入る風色の殆んさすべてが我等の注意を惹いた。最初の目的地京城驛頭にては西田、今西教授其他京城帝國大學諸教授の出迎を受け、恰も京城の鎮守京城神社の祭典にて賑ふ夜の街を横ぎつて宿泊所に着いた。

十月十九日

東本願寺——總督府博物館——景福宮——朝鮮神宮——昌徳宮——秘苑——京城帝國大學——史學科交驛會

朝八時半出發。南山を登りて朝霧になびく市街を大觀し見學は南山東本願寺内にある新羅式梵鐘より始つた。

これは新羅朝敬順王の命によりて鑄造されたミ傳へられもミ京畿道砥平郡龍門山上院寺にあつたもの、その特徴は韓式ミ支那式ミの折衷にあつて唐草文様ミ天人の陽刻ミがある。此附近一帯の高臺は倭城臺ミ稱し文祿の役増田長盛、大谷吉隆の駐屯してゐた所である。倭城臺を下

り南大門通を経て鐘路に至り普信閣の巨鐘を見る。高さ一丈周圍二丈餘、鐘路の名稱これから起り、その大きき傳説に依つて有名ではあるが美術的價值は殆んど認められぬ。これより大韓帝國建設の記念碑閣を過ぎて光化門通に出る。この大道は景福宮に達する道であつて兩側には舊韓國政府の諸官衙の門が並び立ち、今もその佛を造してゐる。光化門通の正面にはアメリカカン・ルネッサンス式の白色花崗石の壯麗なる朝鮮總督府廳が岩骨稜々たる北漢山を背景としてその威嚴を保つてゐる。その内部にある總督府博物館は大正四年朝鮮施政記念博覽會の際美術館として設計されたもので朝鮮の各時代に互る遺物が豊富に陳べられてをり、朝鮮美術の優秀をこゝに見ることが出来る。館を入つて多數の佛像を見た。第二室に三國時代及び新羅一統時代の遺物が並べられてゐる。中に新羅の遺物たる金鈴塚發見の純金製冠が光を放つてゐる。百濟のものとして目を惹いたのは木棺ミ甕棺ミである。木棺は内地では餘り見られないがこれは大正六年全羅北道益山郡八峯面石旺双陵の大墓から發掘されたも

ので、高さ二尺二寸五分、長さ八尺二寸あり内部には金銅の板を張り四神が描かれてゐる。甕棺は羅州潘南面發掘で陶製大甕二個の口を合せ一は長さ六尺一寸、徑三尺六寸、一は長さ三尺徑二尺六寸、發掘當時は金銅製寶冠耳飾、杵なごを屍體に着け、金銀の作大刀、勾玉、瑠玉を以て飾つてゐた云ふ。任那や高句麗の遺物としてはさしたるものがなかつたが新羅統一時代のものには綠釉の四天王甕、鬼面遊鑲式陶瓮及び佛像が人目を惹く。第三室に入るに高麗李朝時代の白磁青磁、繪高麗、天目、三島手、等の陶磁器が並び、これに混つて金屬器、漆器或は裝飾品、裝身具等の類も見える。階上の第四室には支那蒐集の漢代遺物や樂浪帶方郡遺物がある。漆做樂、封泥、樂浪禮官瓦當、弩、青銅製弩箭頭杯が主なるものである。廊下に出るに日本ミ密接な關係を偲ばせる石器、土器、銅劍、銅銚等及び高麗時代古墳發見の漢式、唐式宋式、日本式鏡が陳列されてゐる。其他朝鮮活字には木活字、鐵活字の外に珍らしいものとして陶活字、諺文活字もある。朝鮮では高麗時代既に活字印刷の術が開け恭

讓王四年書寫院を置いて活字を製し印刷したミ云はれる。

博物館を辭して景福宮の正殿なる勤政殿へミ急ぐ。景福宮は大祖三年に營建されたが壬辰の亂(文祿の役)の回祿に遭つて以來二百八十餘年間僅に殘礎を荒草の間に止めてゐた。我が慶應三年大院君が王宮の尊嚴を示さんが爲に一世の民力を盡して作つたもので、民間之を諷刺する多くの歌謠を生じたのも是時の事である。この宮殿は明治二十八年乙未の變に至るまで約三十年間王宮として使用されたのみで景福宮は再び荒廢に委せられた。李朝時代朝賀の大禮を行つてゐた勤政殿は賦彩頗る鮮麗である。殿前より勤政門の間に文武兩班の左右に列立するたぬ一品より九品迄の標石の立てるを見て昔日の盛儀を偲んだ。勤政殿の後の萬春、思政、千秋の三殿を経て修政殿に至るミ大谷光瑞師等中亞佛蹟探險隊の蒐集品なる壁畫、佛像、陶銅器、磚佛、等が陳列されてゐる。圖録等にて見たものではあるが今其實物を見て西域文化を思ふこゝが深い。次に景福宮の庭園に入り慶會樓に憩ふ。樓

は周圍に池ありその構造壯大、高さ十五尺の石柱四十八本を以て支へられた大樓閣であつて往時韓國朝廷の遊宴場、李朝末期の代表的建築の一である。食後博物館庭を歩めば所々に高麗時代新羅時代の幾多の石塔石碣が立つ。博物館事務所ミなつてゐる清譚樓や往時支那使節を迎へてゐた修玉齋を経て後苑深く進めば閔妃遭難の地に到る。庭園荒れて草茫茫陰慘の氣地をこめ往事が眼前に髣髴する。

總督府より自動車を驅つて途中大漢門、南大門を見、朝鮮神宮に詣づ。後に南山を負ひ三方開濶して展望に宜しく峨々たる北漢山や漢江の長流を指呼の間に眺めながら社頭にて京城大學教授小田省吾氏の講演を聽く。先づ京城の地勢歴史より説き起し文祿以前に於ける日支兩國の朝鮮に於ける地位を述べられ轉じて文祿慶長の役ミ日本諸將陣地に就ての新研究を最近發見の地圖の寫に據つて説明さる。即ち加藤光泰の部下高木貞朝が碧蹄館の役の時使つた「朝鮮國大裏並に陣場之圖」である。終つて神宮に參拜した。祭神は天照大神・明治天皇の二柱で社殿

は森嚴幽邃なる背景に映じ、おのづこ参拜者の襟を正させる。

李王家の昌徳宮では特に一行の宮内拜觀を許された。

昌徳宮の正殿は仁政殿で正面に玉座あるも明治四十一年の改造に依り内部の原形は失はれた。今を去る五百三十年前壬辰の亂の兵燹に罹り現在のものは仁宗の時約百二三十年前の建築に成り今では公儀に使用される。仁政殿の外注意を惹くものは宣政殿であつて甃瓦が用ゐられる。支那燒の瓦で朝鮮に於ける唯一の遺物として名高い。

李王職の許可を得て祕苑に入る。坪數七萬、東洋に於ける一大名苑で丘陵起伏老樹畫なほ暗く、其間紅葉を交へ亭榭樓閣屈指に違なく閑雅幽寂の境地をなしてゐる。苑の奥まつた所に純朝鮮式民家の様式を取つた演慶殿がある。明治十七年事大黨の首領閔氏の暗殺を發端として起つた變亂の際竹添公使が李王を擁して此地に遁れ支那兵と交戦して昌徳宮闕を兵馬劍戟の巷ミ化したのである。

秋陽西に傾く頃、京城大學を訪れ古文書土俗参考品を見た。公文書の中で李王が支那皇帝に上る時の名刺が極

めて細字で書かれてゐるのは京都大學所藏の朝鮮國書を思ひ浮べて興味あるものであつた。私文書には奴婢賣買の文書や財産分配狀、戸籍等がある。土俗参考品としてはシャー・マニズムに關係ある巫帽、巫服、巫具、巫神像巫樂器等それ々に感興をそゝつた。午後四時半兩大學史學科交驛會が開かれ京城大學法文學部長安倍成氏の挨拶西田教授の答辭があり次で教授學生の自己紹介や旅中の感想談に花を咲かせた。席上藤塚教授が最近崔南善氏の藏書中より得られた異本『龍龜手鑑』を示され「龍龜手鑑」の異同に就いて説かれたのは有益であつた。歡未だ盡きぬ中に名殘惜しき宴は閉ぢられた。

十月二十日(李王職博物館)奎章閣
朝鮮總督府圖書館

午前八時宿所を出發し三々五々バコダ公園及び經學院の自由見學を行ふ。バコダ公園は圓覺寺の舊址で園内には高さ四十尺の寒水石塔がある。三層の基壇をたゞみ上部七層ミ下部三層ミより成り上部七層には佛像を、下部三層には十二會の圖を四面に刻し、基壇三層には人物、動植物等を鐫つてゐる。取卸された上層三基には清正が

此塔を持ち歸らんとしたこの傳説がある、が勿論例の虛傳である。尙園内には大圓覺寺碑があり、圓覺寺の緣起を述べてゐるが風雨に磨滅して殆んど讀むに堪へない。

經學院は總督府施政前までは成均館と稱し朝鮮舊時の最高學府であつて文廟を虔奉し經學を講習する神聖の場所として尊崇されてゐた。明倫堂大成殿がある。大成殿には孔子を主座として四聖、十哲、六賢を安じ、東西兩廡には支那朝鮮の儒賢百十二人を祀り春秋二回に釋奠を行はれる。

午前九時半昌慶苑入口弘化門に集合し李王職所管の博物館を見る。館は昌慶宮の古建築物である。明政門を潜れば明政殿には石彫刻陳列館があり、古器・石棺・轎輿類陳列館では慶州や咸鏡道地方で發見された石器時代の石器例へば石斧・石環・石庖丁・石鏃・石劍等が異彩を發つてゐる。新館二階にある陶器陳列館には世界一とも云ふべき高麗陶器のコレクションがある。こゝで李王職技師下郡山氏から一通り高麗燒に關する説明を受け技術の精巧な種類の豊富さに一驚を喫した。高麗時代は宋の影響

を受けて陶磁器の製作は古今獨歩であつた。全羅南道康津郡大口面發見の古陶窯跡遺物に依つて見らるゝ如く青磁は朝鮮で燒かれたものであるが天目釉等の支那傳來のものがあるのも注意せねばならぬ。佛像寫經陳列室で注意を惹いたのは三國時代の金銅如意輪觀音像であつてその衣紋を現はす手法の如きは我が飛鳥時代の像を思はせた。博物館の庭には漏刻があつて嘉靖丙申の銘を有し、朝鮮中宗三十年の製作に係る。高さ六尺六寸景福宮迎秋門内報漏閣に使用されてゐたものである。

自動車を飛ばせて奎章閣に赴き先づ井上琢磨氏の説明を聽く。奎章閣はもつと宗親府(宗正府)と云ひ歷朝宮中に存し王家の人事に關する事務を取扱ひ系譜畫像を保管してゐた。朝鮮併合後四箇所の史庫に藏められてゐた文書記録の大部分をこゝに集めたものである。史料として貴重な李朝實錄、承政院日記、其他謄錄等を展覽した。江華本李朝實錄は臘檔本で太祖より哲宗に至る四百九十九年間に亘り一千七百十五卷一千八百八十七冊がある。其中李朝太祖實錄は縦一尺七寸九分、横一尺四分の大きさを

有し大祖在位七年間に於ける政令其他の事實を記録したものである。猶ほ謄録には溧人謄録・倭人請求謄録・溧倭入送謄録・島主告還差倭謄録等日本特に對馬に關係あるものも見受けた。

更に自動車を驅つて朝鮮總督府圖書館を訪れ、こゝで畫食を喫し、蕨山館長の説明を受けながら朝鮮史關係史料の展覽を見る。就中名士の旅行文朝鮮が支那に藩屬せる時代の多くの文書、世家の系譜・曆書・地圖があつた。崇徳二年六月初四日日附の「寛温仁聖皇帝詔諭朝鮮國王云々」云ふ詔諭採珍しく思はれた。

午後一時二十分平壤行の汽車に乗る。時間切迫の爲め朝鮮史編修會訪問を割愛するの止むなきに至つたのは一行の遺憾とする所であるが朝鮮史料展觀目錄に依つて主なる朝鮮史料を知ることが出来たのはまだしもの慰めであつた。

十月二十一日

江西古墳——藥浪古墳——平壤府立博物館——乙密臺——箕子廟——牡丹臺——練光亭

平壤驛を出發して岐陽驛に着き道廳の好意に依つて待

たされてゐた自動車に分乘し北鮮の野を疾驅して江西古墳に至る。所謂遇賢里三墓であつて三墓の圓墳は耕地の間に鼎立して大きに依り大墓中墓小墓名づけられてゐる。道視學西田榮三郎氏の案内に依り先づ中墓から見學する。大さは直徑百五十尺、高さ約二十六尺、周圍を柵で繞らしてある。原形の花崗石の石扉を潜れば東西十尺二寸南北十尺七寸、天井の高さ八尺五寸の玄室に入る。四壁皆一枚石で作られ天井は二重の持送りの上に大石を覆うてゐる。天井には日月・鳳凰・蓮花文を、四壁には朱雀・蒼龍・白虎・玄武の四神を描かれてあるが、その力強き運筆は觀るものを魅せないでは己まぬ。大墓も周圍は塙を以て繞らされ墳徑百七十尺高さ二十九尺玄室の廣さは東西十尺三寸南北十尺四寸五分天井の高さ十一尺六寸。玄室内には棺臺と思はれる二枚の石床があり、天井は四重の持送りになつてゐる。四壁には四神圖を描き天井・持送りに忍冬文・蓮花文・麒麟・鳳凰・天人・飛雲・神山・山岳・花木・鳥獸等を見はし、天井の中心には雲龍文を描く何れも我が飛鳥奈良時代の藝術を思はせる。石にはカー

プをつけて圓味を見せてゐるのは何となく氣持がよい。
以上二基の古墳の壁畫は高勾麗末の精鍊された技巧を代
表するもので實に南北朝時代の支那藝術と飛鳥時代の我
國のそれとの聯絡をつけ兩者の關係を益々明瞭ならせる
ものである。たゞ惜むらくは壁畫が明るみに出されて以
來染料の脱落して、次第に明瞭さを失つて行くことであ
る。

平壤に引返して少憩の後再び自動車を飛ばして大同江
の大鐵橋を渡り江に沿うて下ること半里。丘陵起伏する
一帯の地に累々たる古墳を見る。近時考古學上、發掘を
行ひ學界に貢獻する所頗る多きを以て、その名夙に知ら
れてゐる樂浪古墳はこゝである。一行が見たのは石巖里
にある磚槨墳と木槨墳との二基であつて大正十四年東京
大學原田助教一行が朝鮮總督府と協力して發掘調査し
て世人の注目を惹き樂浪の名を頓に高からせた古墳であ
る。先づ順序として磚槨墳より見始める。辛うじて羨道
を潜り蠟燭の光を通じて見るに玄室には漢代特有の文様
ある磚でアーチ形に積み上げられてゐる。別に今一つの

玄室へ通する孔があつたが水が溜つてゐて覗くことが出来
なかつた。この磚槨墳の西方數間離れた所に木槨墳があ
る。八疊敷位の玄室の中には厚さ一尺程の木材で作られ
たほぼ正方形の木槨があつて中央で仕切られてゐる。こ
の外に繼ぎ足した棺がある。中央に男、左右に女を葬つ
たのであらう。棺の上に横木を渡しその上に角材が並べ
られてゐた。發掘の時はこれに一杯水が溜つてゐたが、
それが木槨は勿論、種々の副葬品をも腐蝕變色せしめな
かつた所以で水と泥の中から拾ひ上げられた時は見る
べく變色して行つたこと云はれる。

一行は更に自動車の人になつて古墳群の間を一巡し樂
浪郡治の後期の址を見る。大正二年今西博士・谷井學士の
調査に依つて大同江の左岸土城里が後期の郡治址なるこ
こを確めたもので、東西約六町半南北約五町半の土築の
城壁を以て圍まれた丘陵の上にある。漢民族が母國文化
を齎てより約四百餘年間、文化傳播者として四隣の民族
に影響する所大であつた樂浪郡も今はたゞ茫々たる廢墟
を示すのみである。此附近に其の當時使用した古瓦は往

々にして發見せらる。

午後は平壤府立博物館に於て館長針替理平氏の案内に依り樂浪郡時代の遺物を見學した。銅器・鏡類・陶器・漆器・武器・馬具・服裝品・古錢・瓦磚類等隨分數々の物が集められてゐる中で一行の興味をそゝつたのは孝文廟銅鍾と

秦戈とである。銅鍾は孝文廟にそなへる祭器として酒を盛る壺である。「孝文廟銅鍾容十升」重卅七斤」永光三年六月作」に云ふ銘があるのはこの銅鍾をして絶大の價值あらせるもので漢代文化研究には見逃されぬ。秦戈は秦始皇帝二十年の作に云はれ尖頭部を敵に打込みて搔切る用をなす武器である。その銘に

(表)洛都武上郡庫

(裏)廿五年上郡守廟」口造高奴工技師窳」丞申工缺薪社

と見える。博物館を辭して牡丹台乙密台に登り西田榮三郎氏より遠くは文祿の役近くは日清戰爭に就ての説明を聴く。乙密台を下るに松林の中に箕子廟を見出す。龜跌の上に「箕子陵」に鑄つた石碑があつて其背後に陵墓があ

る。前に文班武班の石人を控へてゐる。李朝に入つて箕子尊崇の念の深きを加へた氣運に投じて鮮・于・韓・奇の四氏が争つて神官となりその祭祀に任ずるを無上の名譽とするに至つた。廟の柱に日清戰爭當時の銃彈の痕を留めてゐるのは痛ましき記念である。

牡丹臺下より舟で大同江を下り大同門に至る。此門は二重屋根三層樓の建築で李朝初期の藝術品として建築史上尊重されてゐる。門の傍にある九重の舍利塔を経て大同門に並んで大同江に蒞む懸崖の上に立てられた練光亭を見る。文祿の役小西行長と沈惟敬とが樽俎接衝した遺址と傳へられてゐる。平壤見學はこれで終つた。

〔向居〕

● 史學研究會

例會 昨年九月二十九日午後一時より樂友會館樓上に於て開催、左の兩君の講演ありて午後五時閉會した。

正倉院御物彩繪佛像幡に就いて 源 豊宗君

正倉院の南倉階下北棚に陳列されてゐる彩繪佛像幡に

稱せられる一條の幡は一般には天平時代の作品とせられてゐるやうであるが、其の様式、技法、彩色法、構圖、更に圖像學的形式即ち此像の姿勢、手の印相、寶冠より仔細に觀察すれば、夫れは明かに貞觀時代の密教美術の特徴を具備して居り、其の時代の製作であらうと思ふ云々。

ドイツ前皇太子の近著を讀む

文學士 時野谷常三郎君

フリードリツヒ、ウイルヘルムが千九百二十六年の夏、「余は眞理を求む」Ich suche die Wahrheit」ヲ題して、

世界大戰の責任に關して、彼が論説を發表した。之は戰前の外交政略を、遠く千八百七十年の獨佛の葛藤より筆を起し、大戰勃發直前、サラエヴォの暗殺に及んで終つてゐる。而して聯合國側の代表が獨逸に提出したる和約の草案に於て、獨逸皇室の傳統精神たる侵略的政策を指摘し、軍國主義を以て歐洲の羈權を掌握せむとするを難じたるに對し、彼は之に報ゆるに或はルイ十四世、或はナポレオン一世の例を以てし、獨逸の地理的事情は軍備

を忽諸に附し難を説き、伊太利の統一を援助しながら、獨逸統一のための戰を非とするを駁し、更に戰時中宮廷に於て發見せられたる欽定文書によりて、所謂エムス電報の真相を闡明して、當時獨逸は挑戰的ならずと論斷してゐる。以上紹介の後、之に對する批判を以て結ばれた。

大會 昨年十二月八日午後一時より京都帝國大學樂

友會館樓上に於て開催、左の三氏の講演あり、其間評議員の改選を行ひ、午後六時講演を終了した。

中世文化の基調 文學博士 平泉 澄君

本號に掲載せられたるを以て略す。

渤海の上京龍泉府に就いて

京城帝國大學教授 烏山 喜一君

大正十五年に吉林省寧安縣の西南、東京城なる古の渤海上京龍泉府の地を踏査せられた結果に據つて、その地勢、廣袤、遺址、遺物に亘つて縷述せられ、殊にその出土の瓦の紋様等より渤海の文化が高句麗のそれと關聯をもつものなるに言及された。最後に地下に埋もれた史料

を以てこの方面の歴史研究に向ふ士の現はれんことを切に唱導せられた。

支那古典の年代に就いて

京都帝國大學教授 新城 新藏君

本號に掲載せられたるを以て略す。

右終了後、引續き晚餐會を開き、席上内藤虎次郎博士藤崎俊茂、岡崎文夫、若山善三郎、魚澄惣五郎、能勢丑三、石田幹之助等諸氏の小研究の發表があつて午後十時閉會した。

●讀史會

例會 昨年九月二十八日午後六時半より樂友會館第

一號室に於て新學期最初の例會を開催、三浦教授其外三十名參會、左の研究發表ありて十時過散會した。

戰國時代諸雄の富強策

佐々木茂八君

戰國時代の諸雄は各々自國の民政に注意し消極的には愛民主義撫民主義を取り積極的には人民の逃亡他國への移住を防ぎ自國に入るを歓迎したが、彼等は専ら人民か

らの收税をのみ目的として居り、絶え間なき戰亂に要する軍資と他國を壓服すべき軍費を得るため特に農業商業を保護獎勵することに依つて富國たらんことを企圖した。良貨たる渡唐錢と惡貨たる私鑄錢とが同時に行はれてゐたこの時代には經濟界の混亂は免れ得なかつたけれども其間又徳川時代に於ける封建制度の基礎の確立を促す種々の施設や近世的の曙光を覗ふに足るものが現はれてゐる。云々

鎌倉時代に於ける末法思想の一考察

武藤 誠君

平安末期に於ける社會の混亂は當然末世的意識の勃興を促した。法然上人は此期に於て末法の教としての念佛宗を説き民衆は彼等の體驗の如實なる證明の故に末法たる事を自覺してその教に歸依し、かくて京都貴族を中心とする世界に於て末法思想は成長を遂げた。末法思想の心理的起源を考へるならば傳教大師以來三時は説かれたけれど教理として考へられたに過ぎぬ。そは時代の背景が切實なる自覺を呼び起さなかつた爲であらう。同様の

事が鎌倉時代に於て京都貴族と反對の立場にある武士の社會にも認めらる。鎌倉時代末期及び南北朝時代に起つた種々の事件は思想界に變動を與へた。即ち蒙古襲來が喚起した神國思想は末法思想を弱めそれを可能ならしむる力は後醍醐天皇の朝に現はれた革新思想である。この思想的徑路をよく示すものは愚管抄と神皇正統紀であらう。云々

明治維新の平等思想に就て

文學士 伊藤 八郎君

五箇條の御誓文に現はるゝ平等思想を前時代に求むるならば既に朱子學・陽明學・心學にその萌芽を見るこゝが出来来る。幕末に至り洋學盛行を極めて以來、英國流の功利思想や佛人の天賦民權説も亦輸入された。事實に就て之を見るに百姓一揆が單に奉行の更迭を以て満足せず義民傳が民衆の間に人氣を博したのは階級意識に立つたものと思はる。幕末に於ける新思想の保持者は又階級打破の實際運動を起してゐる。斯かる事柄より推して自由平等思想が維新改革の一原動力と見られるのである。この

思想は明治維新に於て政治社會上強く現はれ種々の改革や組織變更が行はれた。然るにも拘らずこの精神の運動が徹底を缺いた理由如何と云へば改革が維新と同時に王政復古であつて當時は新思想の保持者のみではなく階級思想に膠着してゐるものも存在したに依る。云々

例會 十一月二日午後六時半より樂友會館第一號室に於て開催。三浦教授其他三十八名參會、左の如き研究發表ありて十時半閉會した。

中世前半の武士階級の思想と禪 池田 修造君

輪廻思想と現實經驗の實證とに育まれた中世的歴史哲學の中に武門の政治思想も成立したが、現實への自信強き其思想には「我」の力を説く禪との結合がある。しかも其階級成立の基礎が私的恩義に在る處に國體觀念との二元的矛盾があり、同じく「我」を説きつゝも其を國家原理の中に見んとする神皇正統記の思想と對峙する。而して佛法に依つてのみ世法ありとする政治思想(夢中間答)と教界一般の國史認識の不足とは禪僧をして實力ある武門に倚り其を祝福せしめ、又之に精神的支援を求めた武士

の現實の執着により祈禱禪の傾向助長もなるが、其二元的矛盾の解決は與へ得ず武門棟梁の終始不免る苦悶となつた。云々

御大禮に關する服裝 文學士 江馬 務君

文武天皇大寶元年の衣服令に規定された禮服、朝服、制服の中御大典には朝服が用ゐらるゝ、こゝより説き起し男子の朝服は束帶であつて衣冠直衣あり、直衣は天子のみ之を用ひ衣冠は掌典が用ゐるゝこゝを述べ、大口、袴、下褌、袍、石帶、笏、冠、大刀の個々に就て説明を加へ、女官の服裝には唐衣、裳、五衣、袴、日扇、疊紙があるこゝを説き、一々其實物に依りて束帶の着方をも示さる。御大禮も目睫に迫れる折柄、多大の感銘を與へた。

例會 十一月二十三日午後六時半より樂友會館第一號室に於て開催 三浦教授中村助教授其他三十一名參會。左の講演あり、十時半散會した。

朝鮮旅行報告(歴史的方面) 向居 淳郎君

同 (考古學的方面)

右は去十月中旬舉行した朝鮮見學旅行の報告であるが本誌彙報欄に掲載するを以て省略する。

大嘗祭及び大饗第一日之義

文學博士 三浦 周行君

大嘗祭大饗第一日の儀及び夜宴に參列の光榮を得られた當日の光景を精密に感銘深く述べられた。大嘗祭に就ては森嚴崇高なる御親祭に對する感想を、大饗第一日の儀及び夜宴に就ては恩賜の挿華や菓子器を前にして式場の模様料理の献立等を語られ就中白酒黒酒に關する挿話は特に興味を惹くものがあつた。

大會 昨年十二月一日正午より大學學生集會場樓上大講堂に於て、大禮奉祝の意を寓して第十九回創立記念大會を公開し、左記各題目の下に各自新研究を發表するに共々に、講演に關係ある記録古文書繪畫寫真其他遺物等を展觀したが、約二百名の會衆を得非常な盛會であつた。午後五時半豫定の講演を終り、更に別室に於て會員の晚餐會を催した。出席者三十八名、快談に花を咲かせ時の移

るを知らず。九時散會。講演概要左の如し。

令集解の校訂

文學士 藤 直幹君

令集解の第一回校訂は文應、弘長、建治年間妙光寺内大臣藤原師繼によつてなされた。これは金澤文庫本と呼ばれるもので内閣文庫本、山田清安本、菊亭家本の三つの系統をもつてゐる。近世の初頭慶長年間には清原秀賢が大規模の校訂を加へてゐるがこれは金澤文庫本とは自らの別の形をこるものである。爾後寛永及び萬治年間に行はれた校訂の事業は何れも秀賢本系統に屬する異本を集めて對校するのみであつて令集解校訂には大なる地位をもたぬ。明和安永年間稻葉通邦に至つては校訂に一步を進め自己の學識意見を以て選擇してゐる。但し彼を繞る名古屋藩の人々は令其者の字句の出典等を究むるのみに止り、制度や歴史全體には考へ及ばなかつた缺陷がある云々。

舊大内裏並に花背村の遺跡に就て

文學士 佐藤 虎雄君

平安京大内裏豐樂院趾並に大政官廳趾より發掘した古

瓦には蓮華文疏瓦、唐草文華瓦、碧瓦、鬼瓦、鷗尾殘缺がありその製法形式より推して平安朝の初期又はそれに近い時代のものとされる。是等に依つては又奈良朝時代の様式をも窺ふこゝが出来、從來文獻の上で研究されてゐたものが考古學的に一大進捗をなしたと云ふべきである。猶ほ花背村からは最近三個の經塚を出した。其等の出土品には土製及び銅製の經筒、經卷、鏡、陶器、木製品、刀劍、古泉等がある。推定年代は大體藤原末期より鎌倉初頭にかゝるものであつて、經塚が盛行を極むる藤原末の遺跡として又内容の豊富な點に於て其特色を有つ云々。

堀川塾に就て

文學士 山根徳太郎君

堀川塾即ち古義堂は後西天皇寛文年間伊藤仁齋に依つて京都堀川下立賣に開かれ連綿として五代目の光齋（重光）の歿する明治四十年まで續いてゐたが、そこには藏書目錄以外に多くの未整理の文獻がある中に、仁齋以後半世紀間の學問の發展を知るべき草稿本がある。是等によつて仁齋の人を爲りを考ふるなれば彼は學問上の業績

を擧げる傍ら町人との融和を考へ御觸等にも注意してゐた。幕府が浪人を取締り公卿との接近を禁じてゐた時京都公卿の學風を一變せしめた仁齋が縉紳との間の交渉に於て一度も物議を醸させなかつたのは其細心の注意と正しい行があつたからであらう云々。

川端道喜の粽

文學博士 西田直二郎君

川端道喜は同家の所傳によるに戰國時代の頃より御所近くに住し粽を供進する等御所との關係深く天正五年には御所修理の功によつて正親町院より女房奉書を賜つた家柄である。天正五年十二月村井貞勝より諸役免除の折紙を道喜に與へたのは信長の禁裡修理の際、道喜が築地修復に忠勤を抽でた爲であり、又秀吉の都城修理の際前田立以が諸役免除の安堵狀を出したのは先の禁裡修復の功に依つたものである。此等の文書によつて知らるゝ道喜の事蹟は御湯殿上日記の記事と一致する。元龜三年八月の下知狀によれば道喜がも中村五郎左衛門と稱した頃佐子上藤局の被官人となつて居り永正九年九月の餅座に關する文書は川端家が餅商に關係してゐたことを示

す。道喜が餅を商ふ事によつて富裕となり禁裡近く住するによつて禁裡に近づき築地修理に家産を傾けて勤王の事にたつさはつたのは蓋し事實であらう。六丁（道喜の居住する附近の町）關係の文書も間接に道喜の忠勤を示すものである云々。

近世の生める二大史家

文學博士 三浦 周行君

本誌研究欄に掲載されてゐるから内容紹介を略する當日展觀に供せられた陳列品は十一月十二、十三兩日文學部古文書室及び國史陳列室に於ける大禮奉祝特別展觀の際陳列したものを中心として更に加除され、五區に分つて陳列された。第一區は主として舊大内裏及び花背村の遺蹟に關するもので以前出陳した古瓦類の外其等出土品の發掘地、發掘狀態殊に基壇を明示するが爲めに十數葉の寫眞、又丹羽圭介氏の蒐集に係る古瓦の拓本を加へ且つ殿堂遺蹟の參考として南山城上狛村高麗寺趾發見の古瓦並に南山城加茂町法華寺野に於て發掘した瓶原離宮國分尼寺關係の遺蹟の寫眞を副へた。其他花背經塚及び

鞍馬出土の遺物の寫眞丹後越前兩國發見の土製、銅製の

經筒及び寫經の實物をも出陳した。第二區では川端道喜

粽供進の櫃、正親町天皇の女房奉書等の資料を陳列し、

第三區は更に二部に分ち第一部では徳川光圀第二部では

新井白石關係資料が陳べられた。第四區では令集解校訂

の事業を説明する古寫本各種の奥書を系統的に陳べて令

集解校訂についての古人苦心努力の跡を偲ばせた。第五

區の陳列品には仁齋自筆の日記「日並の覺帳」二冊を始め

まして堀川塾關係の圖書、遺稿の原稿、筆蹟畫像等があ

つた。覺帳の一は天和二年七月朔日から起り翌天和三年

六月まで一は同年七月朔日から十二月晦日までのもので

これに據つて仁齋の私生活、古義堂の狀況なきを徴する

ここが出来る面白い材料であつた。

●西洋史讀書會

例會 十月五日、於樂友會館、時野谷助教歸朝歡

迎會を兼ねて開催。時野谷助教其他三十名出席。左の

講演あり。

Delpinの信仰に就いて

文學士 村田數之亮君

歐米旅行談

助教 時野谷常三郎氏

例會 十一月二日、於樂友會館。時野谷助教其他十

五名出席。左の講演あり。

On Milton

辻村 正吾君

Protestantismの沿革

高井 貞橘君

例會 十二月七日、於樂友會館。左の講演あり。卒業

生以下十八名出席。

Saintsに就いて

氷川 温二君

Adam Smithの都市對農村觀

村上 一郎君

●南滿洲牧羊城址發掘

東亞考古學會第二次の遺蹟調査として南滿洲旅順管内

牧羊城址の發掘が昭和三年十月一日から同月二十五日に

亘り續行せられた。京都帝國大學の濱田耕作教授と東京

帝國大學の原田淑人助教授の方策のもとに東京帝國大學

から田澤金吾、八幡一郎、京都帝國大學の水野清一、島

田貞彦外、東亞考古學會の島村孝三郎、小林胖生、關東廳旅順博物館の内藤寛、森修諸氏の参加援助するものであつた。

牧羊城址は從來漢代の一遺蹟として既に大正初頭に於いて濱田教授の部分的發掘あつて其の重要な遺趾を明かにするものであつたが今次更らに大々的の發掘の行はれたるものである。

遺蹟は東西四十三間、南北七十五間を算する長方形を有し、其の周圍に土壁を繞らせるものであつて、これに東西に南北を貫通する大溝を穿ち種々の遺物を發見するものがあつた。

如上の城址發掘に附隨して附近に點在する各種の漢代の墳墓類が究明せられ、これ又た頗る見るべき成績を擧げるものがあつた。今またに兩者の主要なる遺物を擧げ今次發掘調査の概要を記すものである。

牧羊城址發見遺物

貨泉—明刀錢、明刀圓錢、一刀錢、半兩、五銖、大泉五十等。

瓦類—馬形紋様半瓦當、采末央半瓦當、長末瓦當、藤手文瓦當、紋磚等。

刀類—環刀、環刀子、小刀子等。

銅器—帶鉤、鍔、弓筈等。

鐵器—鍔類、鐵鉤等。

玉類—管玉、玻璃丸玉等。

鍔類—石鍔、骨鍔、銅鍔、鐵鍔等。

石製品—石斧、石庖丁、石錘、紡車及骨角製品等。

墳墓發見遺物

第一號貝墓(刀家塚所在)瓦盤一、瓦壺二

第二號貝墓(同上)瓦盤一、瓦壺一、人骨殘片

第三號貝墓(同上)人骨

第四號貝墓(龍王廟附近)人骨殘片

第五號貝墓(千家塚)瓦盤四、瓦壺三、人骨

第六號貝墓(綱家塚)瓦盤一、瓦壺一、玻璃耳璫一對、

人骨

第七號貝墓(千家塚)瓦盤三、瓦壺一、瓦豆一、鐵帶鉤

一、人骨殘片

第一號石墓(龍王廟附近)瓦壺三、瓦豆四、瓦碗一、人骨殘片

第二號石墓(同上)

第三號石墓(同上)玉環一、金銅釧七、小玉一

第一號甕棺(官屯子南方)大小甕

第二號甕棺(龍王廟東方)大小甕

第三號甕棺(同上)大甕、中甕、小壺、幼年人骨

殘片

〔島田〕

●第十四回大藏會

昨年十二月二日、京都佛教各宗學校聯合會主催の下に第十四回大藏會が京都顯道會館に於て開催され、二日から四日まで展觀品を一般の觀覽に供した。其の第一門は皇室に佛教關係資料として第一項には寛平法皇、鳥羽法皇等の宸影、第二項には後宇多法皇、後花園天皇等の宸翰、第三項には光明皇后御願經不空羂索真言經、有栖川宮幸仁親王御筆紺紙金泥經等の御願經、第四項には寛平法皇御作金剛界念誦次第、後鳥羽法皇御作無常講式等の

(御撰、第五項には後水尾法皇御製序のある宗統錄、靈元天皇御製序のある黃檗高泉禪師語錄等の勅序、第六項には大乘三論大義抄、大乘法相研神章等の奉勅撰、第七項には寛平法皇御入壇記、法皇兩界口傳等の雜書を陳列し第二門は大藏經の部として第一項には敦煌遺經中の光讚般若經、長寬頃の寫本大唐西域記等の寫經、第二項には支那直隸有房山縣西域寺にある妙法蓮華經、唐開元十八年の上石なる房山納經碑等の石經、第三項には宋版蜀本の佛本行集經、宋版東禪寺本の根本薩婆多部律攝等の版經、第四項には貞元釋教錄、明惠上人筆唐本一切經目錄等の諸目錄類を陳列した。尙ほ二日には午後一時より同會館に於て本學助教中村直勝氏の「後白河法皇 龍谷大學教授禿氏祐祥氏の「陳列品について」を題する講演があった。

會報

●評議員改選

昨年十二月本會大會に當り會則により評議員の改選投票を行ひ其の結果新評議員として石橋五郎、羽田亨、濱田耕作、西田直二郎、小川琢治、中村直勝、那波利貞、桑原隲藏、矢野仁一、三浦周行の諸氏當選したり。

●寄贈交換圖書

三種の神器より觀たる國民精神發達史(加藤仁平著)

富士の歴史(井野邊茂雄著) 教育研究會
 富士の動物及植物(矢部吉禎著) 淺間神社々務所
 富士の地理と地質(石原初太郎著) 同上
 東洋學報 一七の二 東洋協會學術調查部
 史學雜誌 卅九の九、一〇、一一、一二 學會
 歴史地理 五二の三、四、五、六 日本歴史地理學會
 龍谷大學論叢 二八一、二八二 龍谷大學論叢社

國史と國文 五の五、六 立命館大學出版部
 眞宗學報 四 眞宗專門學校出版部
 史 學 七の三 三田史學會
 史 苑 一の二、三 立教大學史學會
 龍谷大學史學會々報 一、二 龍谷大學史學研究室
 民族 四の一 民族發行所
 人類學雜誌 四三の六附録、一〇、一一 東京人類學會
 考古學雜誌 一八の九、一〇、一一 考古學會
 社會學論叢 五四、五五、五六 日本社會學會
 國學院雜誌 卅四の一〇、一一 國學院大學
 觀 想 五三、五四 觀想發行所
 地理雜誌 一の二、三 國立中央大學地學系
 雜誌索引 二 下戸前繁松
 奈良文化 一五 奈良文化編輯部
 史蹟名勝天然紀念物 三の一〇、一一、一二 同保存協會
 Tôung Pas (通稱) Vol. 26 No. 1 paul pelliot
 商業と經濟 九の一 長崎高等商業學校研究館
 刀劍研究 一四の二二 南人社

●會員動靜

●入會

島根縣能義郡荒島村小學校内

(右紹介者木代修一氏)

東京市外荏原町戸越四一〇

(右紹介者齋藤斐章氏)

東京市外大久保町西大久保三七三

大阪市東成區今福町

京都帝國大學文學部史學科

(右紹介者島田貞彦氏)

京都市下鴨松原町十四小松松之助方

(右紹介者中村直勝氏)

大阪市天王寺區四天王寺境内天王寺高等女學校内

千葉 眞順氏

(右紹介者諏訪義讓氏)

●退會

川上 孤山氏 齋藤清太郎氏 高橋 勝一氏

乙部 茂氏 大山 景敬氏 賀古 鶴所氏
淺見倫太郎氏 深井 渙二氏 佐々木信綱氏
小泉 貞造氏 柴田 喜八氏

●逝去

加藤 喜平氏 植村清之助氏 勝峰 月溪氏
右謹みて哀悼の意を表す